



写真1：小野コレクションの標本箱の例。この標本箱にはシジミチョウ科のミドリシジミ属(ゼフィルス)の仲間がドイツ箱と呼ばれる標本箱(507 mm × 418 mm)に収納されている。  
写真2：標本室における標本收藏のようす。専用の金属ダンスに標本箱が並べて収納されている。

## 昆虫標本 40 万点 —華麗なる寄贈標本コレクション—



大阪公立大学の昆虫標本室には、2025年現在、農学研究科緑地環境科学専攻の環境動物昆虫学研究グループによって収集、または学外の研究者から

寄贈された約40万点の昆虫標本が所蔵されている。それらのうち約20万点は鱗翅(チョウ)目の標本であり、研究のために歴代の教員や学生が収集してきた貴重な資料が含まれている。新種の記載時に基準となるタイプ(模式)標本も含まれており、学術的価値が極めて高い。これらの標本は、国内外の研究者にも広く活用されており、多数の学術成果を支える基盤となっている。そのため、標本の価値は高まっており、分類学や生物多様性研究、さらには進化生物学の発展に寄与している。

昆虫標本室には、学術標本に加え、アマチュア研究者や他の研究機関の研究者から寄贈された「寄贈コレクション」も所蔵されている。これらのコレクションは、昆虫類の多様性を調査・研究するための重要な資料となっており、①近畿地域の昆虫相の特徴を示す標本(地域固有の昆虫相を把握し、その生態や分布を明らかにするための

標本)、②絶滅危惧種などの希少種を含む学術資料となる標本(生物多様性の保全や希少種の保護に資する重要な標本)、③世界の昆虫相とその多様性を示す標本(世界中の昆虫相を比較し、その多様性や進化の過程を研究するための資料)という特徴がある。

これらの標本は、国内外の研究者に広く開示しており、学術的な活用を促進し、地域の昆虫相研究だけでなく、地球規模の多様性研究や保全活動においても重要な役割を果たしている。また、大阪公立大学の授業や実習、大学祭やオープンキャンパス、幼稚園や小学校の見学、地域の観察会などで、一般公開され、市民の方々から好評を得ている。それらの展示を通じて、来場者に鱗翅目の多様性や生態系における役割について理解を深めていただいている。

約70年にわたる歴史の中で、昆虫標本室はさまざまな規模の鱗翅目標本を受贈してきた。それらの中には、箕浦忠愛氏(故人)や小野克己氏からいただいた標本(京都府のチョウ類、写真1)が含まれており、中百舌鳥キャンパス農場管理棟1階の標本室に收藏されている(写真2)。



大阪公立大学・高専基金へのご寄附のお願い  
お申込み時に「特定プロジェクトのために:⑨-3」を選択してください。  
(⑨-3:1号館ミュージアム構想のために)

【お問い合わせ】 渉外企画課 TEL: 06-6967-1836  
<https://www.omu.ac.jp/fund/>

編集発行  
大阪公立大学 大学史資料室  
協創研究センター・大学史編纂研究所  
杉本キャンパス学術情報総合センター6階(大学史資料室)  
Tel : 06-6605-3371 E-mail : gr-gakj-archives@omu.ac.jp

写真3



写真4



写真5



写真6

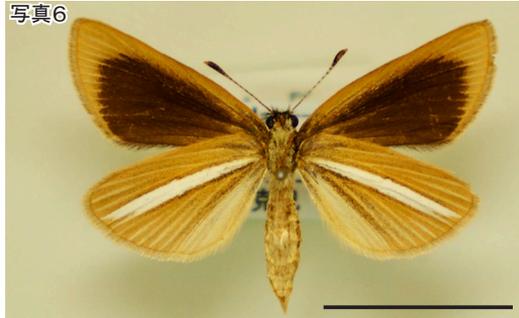


写真7



写真3：オオウラギンヒョウモン（タテハチョウ科）。国内の多くの地域で絶滅し、現在では中国地方と九州の一部のみに生息している。  
 写真4：ツマグロキチョウ（シロチョウ科）。食草であるカワラケツメイの減少に伴い衰退している。写真5：ギフチョウ（アゲハチョウ科）。生息地となる里山の放棄や開発により衰退している。写真6：ギンイチモンジセセリ（セセリチョウ科）。生息地となる半自然草原の減少により衰退している。写真7：キマダラルリツバメ（シジミチョウ科）。幼虫期の生息場所となるシリアゲアリ類が営巣する古木が減少したことが減少要因とされる。  
 写真3～7のスケールは10 mmである。

箕浦コレクションには、1904 から 1969 年にかけて箕浦氏自身が京都市周辺で採集したシジミチョウ科やタテハチョウ科、シロチョウ科の標本が多く収蔵されており、吉田ら（2019）は、このコレクションに収蔵されているチョウ類の種と個体数を解析し、現在では京都市街地付近では消失もしくは個体数を著しく減少させているオオウラギンヒョウモン（環境省絶滅危惧 IA 類、写真3）やツマグロキチョウ（環境省絶滅危惧 IB 類、写真4）といった草原性の絶滅危惧種が、当時は同地に生息していたことを明らかにした。小野コレクションには、1960 年以降に京都府内で採集されたシジミチョウ科、タテハチョウ科、セセリチョウ科の標本が多く収蔵されており、全国的に個体数の減少が懸念されているギフチョウ（環境省絶滅危惧 II 類、写真5）やギンイチモンジセセリ（環境省準絶滅危惧、写真6）、キマダラルリツバメ（環境省準絶滅危惧、写真7）といった希少種の標本も含まれている。今後、箕浦コレクションと小野コレクションを比較検討することで、約

100 年にわたる京都府のチョウ相の変動を解明できるだろう。

このように、大阪公立大学の環境動物昆虫学研究グループの標本は、学術研究だけでなく、教育や市民交流の分野でも重要な役割を果たしている。また、これらの標本は、専門的な研究における基礎資料として利用されるだけでなく、学生の学びや市民への啓発活動を通じて、多くの人々に昆虫の多様性や生態系の重要性を伝えている。しかし、現時点では標本室は収容可能な最大容量に達しており、持続可能な管理を行うために新たな標本の受け入れを停止している。これまで寄贈にご協力いただいた皆さまに感謝申し上げます。今後も収蔵標本を適切に管理し、これらの貴重な資料を活用した学術研究や教育活動に積極的に活用することで、生物多様性の理解や保全に貢献していきたい。（農学研究科 上田昇平）

吉田 周・平井規央・上田昇平・石井 実（2019）箕浦忠愛コレクションから見た昭和前期の京都市周辺のチョウ相。蝶と蛾 70: 109-122.



## 資料室だより

◆大学史資料室では「大阪公立大学 大学史資料室 NEWS LETTER」を発行しています。大阪公立大学の貴重な学術資料や大学の歴史を紹介いたします。◆この「NEWS LETTER」は、大阪市立大学「140 周年展 + 大学史資料館（大学博物館）設立準備 NEWS LETTER」の後継紙であり、「大学の知を発掘！」の番号を引き継いでいます。両紙とも大阪公立大学 大学史資料室のホームページ、図書館ホームページの機関リポジトリで公開しています。

## 大学史資料室からのお願い

現在、学内にある資料の所蔵調査を行なっています。学術資料そのもの、研究の過程で残された資料類、実験装置や器具類、実習に用いられた教材や作品などを、大学史にかかわる資料とともに探しています。候補となる資料がありましたらご一報ください。

→杉本キャンパス学術情報総合センター 6 階 大学史資料室

Tel : 06-6605-3371